

第3章 今後の対策に向けて

1 第1期（平成27年度～令和5年度）の9年間で見てきたこと

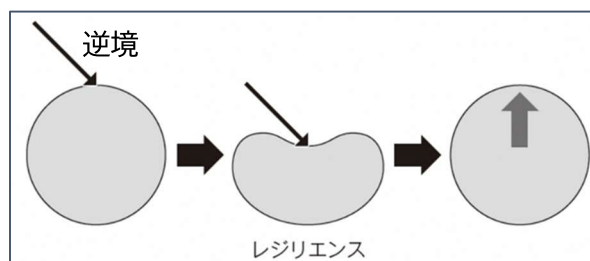
9年間の調査において、子どもの運動頻度の低さや登校しぶり等の事象に共通する要因として、「レジリエンス（逆境を乗り越える力）の低さ」が浮かび上がってきました。調査結果の分析により、レジリエンスを高める可能性がある事柄が示され、子どもを取り巻く家庭環境や生活習慣を変えていくことで子どもの貧困の悪影響を軽減し、連鎖を防ぐ可能性が見えてきました。

（1）レジリエンス（逆境を乗り越える力）の重要性

レジリエンスとは逆境を乗り越える力で、ストレスや困難な状況をしなやかに乗り越え、変化しながら元に戻ろうとする強さです。

レジリエンスが高いと子どもたちはトラブルや困難な場面に直面した際、すみやかに立ち直ることができます。

イメージ図



（2）子どものレジリエンスを高めるために

レジリエンスを高めるために統計上有意な事柄として、以下の6点が浮かび上がりました。

ア 思いやりの気持ち

思いやりのある子どもは我慢することができ、他者のことを考えて行動するといったことがレジリエンスを育んでいると考えられます。

イ 挨拶ができる

挨拶は自己と他者との識別のスタートであり、挨拶を交わし合うことは互いを認め合うことに繋がります。

ウ 野菜から食べる

好きなものではなく「野菜から食べる」といった少しの我慢を実践できた自分への肯定感を高めることができます。

エ ニュースを話題にできる

「勉強をみる」「一緒に体を動かして遊ぶ」などの親子の関わりの中でも、レジリエンスに特に関係しやすいと考えられます。社会の中で起きている出来事を難しいながらも聞くことの我慢や、他者を認識する力が育まれると考えられます。

オ ロールモデルを持っている

目標となる人や尊敬できる人との出会いによりモチベーションが上がり、困難に負けずに頑張ることができるようになります。

カ 親以外に自分のことを「見てくれている」と感じられる大人がまわりにいる

親以外に自分のことを「見てくれている」大人がいることが子どものアタッチメント（愛着）を補強し、周りの人を信頼でき助けを求めることができるようになることで、ストレスに対応することができます。

2 第2期（令和6年度～令和13年度）をスタートさせて

第2期の調査では、第1期の調査結果と比較するために継続する調査項目に加えて、社会情勢や子どもを取り巻く環境の変化等に応じて新たに調査する内容も検討しました。

第2期第1回の調査では、新たな調査項目として、保護者の普段の生活における交流の多様性、子どもの得意なこと等を追加しました。これらを東京科学大学が集計・分析して得た結果から明らかになったエッセンスを記載します。

（1）第2期第1回（令和6年度）の調査から新たに見えてきたこと

新たに加えた調査項目等とレジリエンスとの関連を分析することにより、次のような結果が得られました。

ア 保護者が多様な人々と関わりを持っていること

保護者が自分と異なる属性（高齢者、10～20代の若者、異なる性別、異なる職業、異なる経済状況、異なる教育歴、異なる世帯構成、異なる国籍の8つ）の方と関わっている場合、関わっていない場合よりも子どものレジリエンスが高いことがわかりました。

本調査では、保護者の仕事上も含めた普段の生活の中でこれら8つの特性を持つ人たちと交流があるか（家族や親戚を除く）について調査しましたが、この中で、保護者が「10～20代の若者」「職業が異なる人」「国籍が異なる人」との交流がある場合に、子どものレジリエンス向上への影響が特に大きくなる可能性があることがわかりました。

また、保護者が6つ以上の特性の人々と交流がある場合に、子どものレジリエンスが高くなる効果がみられることが示唆されました（P23～24参照）。

イ 得意なことがあること

「得意なことがある」子どもは、「特にない」子どもよりもレジリエンスが高い傾向があることが示唆されました（P24、31参照）。得意なことがあると、自己肯定感や自己効力感が高まりやすく、困難な状況でも前向きに対処できる可能性があることが考えられます。

ウ 幼少期に読み聞かせの経験があること

本調査では、0～7歳の各年齢について1週間に1回以上の読み聞かせを実施し

ていたかどうかを調査しました。

第1期の調査で、子どもの運動や読書習慣は、生活困難な状況においてもレジリエンス（逆境を乗り越える力）を培える可能性があることが明らかになっていましたが、今回の解析により、新たに、幼少期に継続的に本の読み聞かせを受けることがレジリエンスの向上に関連している可能性があり、特に2歳未満から開始して継続することが効果的であることが示されました（P19～20、31参照）。

（2）今後の対策に向けて

今回新たに加えられた調査項目により、子どもが心身ともに健やかに成長するためには、「保護者が自分と異なる属性の人々と関わりを持っていること」が重要であることが示唆されました。

ア 保護者の交流の多様性を広げる

足立区では、外国人人口の増加や若年者の継続流入など、異なる文化や背景、価値観を持つ人々が増加しており、様々な年齢、職業、家族構成、経済状況、国籍の方々が生活しています。これまでの調査で、困ったときに保護者に相談できる相手がいることが子どもの健康面に良い影響を与えることは示されていましたが、さらに幅広い人々と関わりを持つことがレジリエンスを高める可能性があるという結果が示されたことは、多様な人々・主体との交流を生み出すことができる活躍の場を創出していこうとする区の方針と合致するものです。親が地域と繋がって様々な人々と交流し、地域で子どもの成長を支援する環境づくりに取り組むことが重要だと考えます。

イ 子どもの経験や交流を育む

加えて、子どもについても多様な人々との関わりは重要であり、地域活動に積極的に参加し、経験・体験を積み、ロールモデルとなる大人と関わることでレジリエンスが高まるということが、これまでの調査で明らかになっています。引き続き、家庭、学校、地域社会が共に子どもの豊かな経験や交流を育み、広げていくことも重要です。

ウ 子どものウェルビーイングのために

従来の調査でわかったことや新たに見えてきたことを施策に活かすため、東京科学大学と協力して引き続き分析・検討を続け、全庁を挙げて子どものウェルビーイングを目指して取り組んでいきます。

（3）第2期の今後の調査について

第2期は、今回の調査対象の子どもたちが小学2年生、4年生、6年生、中学2年生の時に調査を実施し、これまでの施策等の効果を確認するとともに、コロナ禍がもたらした児童・生徒の生活習慣・学習習慣への影響も明らかにしていく予定です。調査結果を踏まえ、子どもたちが将来の夢や希望を実現するレジリエンスを身につけるため、子どもたちの未来につながる施策を一層充実させてまいります。